世界史とは何か　その歴史実践

「歴史実践」（英語圏では Doing History という言い方もある）とは、簡単に言えば歴史教育を通じて獲得したものを、現在・将来の生き方在り方に活かしてゆく、ということである。

　無論、単に歴史を教訓的なものとして学ぶというわけではない。

　本書は全５講からなっており、第１・２講で「歴史実践」の方法論について述べたあと、残りの３講を「歴史総合」の３大項目である「近代化と私たち」（18～19 世紀）・「国際秩序の変化や大衆化と私たち」（20 世紀前半）・「グローバル化と私たち」（20 世紀後半から今世紀）に割り振って授業のモデルを提示している。

　それぞれの大項目でテーマとなっているのは、アメリカにおける黒人奴隷を中心とした人種問題、パリ不戦条約（1928 年）に代表される戦争違法化の潮流、そしてパレスチナをはじめとした現代諸地域での「民族対立」「民族浄化」、である。

著者によれば、「歴史実践」はファクト・チェックとその連関性を見極める

①「歴史実証」・

②「歴史解釈」に始まり、それらの歴史的意義づけである

③「歴史批評」とその表現である

④「歴史叙述」、そして異なる解釈・叙述との対話である

⑤「歴史対話」を経て、最後に自らが歴史的主体として生きる

⑥「歴史創造」に至る6つの層から構成される。

本書をラディカルであると評価するのは、まず①②における著者の方法論である。

例えばアヘン戦争について、教科書においては「イギリスのアヘン貿易が清朝の経済・社会を混乱させたために両国の戦争が勃発した」などと記述されるのが普通であるが、著者は異なるデータ・史料を提示してこの教科書の叙述に対して疑問を投げかけるところから始める。

いわゆる探求型授業においても教科書で述べられた「事実」は所与のものとして利用されることが多いなか、生徒に教科書

そのもののテキスト・クリティークを行わせるというのは、教員として（学問的素養はもちろん）大変勇気が必要なことである。

また、著者が描こうとする④「歴史叙述」もかなり大胆である。

第３講ではトマス・ジェファソンと女性の黒人奴隷の物語から、「自由」や「権利」といった概念に特徴づけられる白人中心のアメリカ史を、立場を転倒させて奴隷や女性を主語にした叙述に書き換える試みがなされている。

さらに⑥「歴史創造」においても、戦後の東欧やパレスチナにおける民族追放の歴史から、福島原発事故による避難民の問題に思いを寄せるという、まさに時空を超えた眼差しが提供されている。

こうした著者の歴史実践の裏付けとなるのが、長野県下の進学校から進路多様校まで様々な高校での教員経験である。

著者が校長を務めた蘇南高校は木曽の山あいにある小規模校であるが、そこでも生徒との対話を重視した教育をされてきたようだ。

本書で述べられているような緻密な歴史実践は一見すると進学校でしか実行できないように思えるが、ポイントさえ押さえれば進路多様校でも十分応用可能であり、また暗記中心の系統学習を脱した真の学びを求めているのはむしろ多様校の生徒たちの方である。

本書の執筆を機に著者は校長から再び一教員に戻られるとのことだが、今後の授業実践も是非著作として公刊されることを願いたい。

「世界史教育の土台を形作っている」3冊の本。

歴史実践の2つの世界史と「世界のつながりを考える世界史」の3つのタイプ。

歴史実践の6層構造。

ファクト・チェックの5つの方法。

世界史教育の3つの罠。

「歴史総合」の3つの課題。

歴史対話の5つの方法。

「歴史実践」の方法論づくりは、演繹法でなく帰納法によるしかない以上、ある程度のボリュームになるのは仕方ないとして、その読ませ方、提供の仕方にひと工夫ほしかったかな。

ということで、星3つは伸びしろを見ての評価です。

　先生の実践はまだまだ続いてゆくはずですから、10年後、20年後の再版を待っています。

　なお最後にどうしても気になる違和感を2つ。

違和感その1　（「はじめに」から）

「歴史学が最も大切にしている、「事実（ファクト）は実際どうだったのか」ということを、毎日のように切実に考えてきたのが、校長としての日々でした。

　現代日本ではどこの学校でもそうですが、生徒が人間関係の不安や息苦しさを訴えてきたときに、それがいじめに該当していないかどうか、ファクトを私たちはとても慎重に調査しています。

私や教職員に対する厳しい抗議についても同様です。

しばしば「～の事実があった」という訴えは、主体の強い思いや感情によってことばが使われますから、本当にその「ことば（記号表現・シニフィアン）」の「意味していること（記号内容・シニフィエ）」がファクトと一致するものなのかを詳細に調査し、関係者で対話しながら、学校経営は進んでいきます。」